

## 「活学」としての東洋思想

——著名な東洋思想研究家田口佳史氏へのインタビュー——

筆者が日本に留学に来た直後は、本屋に東洋思想関連の本が並んでいるのを見かけてびっくりしたことがあります。古代東洋の知恵が現代の企業経営に役立ち、人生の困難な時期を支えてくれるなどが書かれていたと覚えています。その中には、西洋哲学にはまっていた私には信じられないようなベストセラーもありました。当時、中国社会全体が近代化を加速させようという雰囲気の中で、多くの人が伝統的な思想や文化にあまり愛着を持たず、むしろ近代化の妨げになるとさえ考えていましたので、そういう本を見ても、あまり興味がわきませんでした。私は中国学を学びに来たわけではないし、本当に学びたいならば、自分で本を読めばいいと考えていました。

その後、偶然のきっかけで、日本の中国研究の書物を少し読む機会がありました。宮崎市定、吉川幸次郎、白川静など、今では中国でも有名な碩学たちの本を読んだら、彼らは非常に優れた学者で、その研究レベルも中国に劣ることなく、文章もいいことに気づきました。恥ずかしいことに、中国の文語である文言文は当時かなり読んではいましたが、本当に文言文を読む習慣を身に付けたのは、吉川幸次郎の『漢文の話』を読んでからでした。それは張中行の『文言津逮』に匹敵するすぐれた漢文の入門書でした。私は中国学を専門としているわけではありませんが、それ以来、中国文化を研究する日本の学者の著作に結構関心を持つようになりました。そのおかげで、宮崎市定がかつて言ったあることの真意をますます確信するようになりました。宮崎はある論文の中で、日本が将来中国に恩返しできるのは、中国史の研究だと言ったことがあります。もちろん、日本における中国研究の全体的な水準を考えると、歴史に限った話ではありません。中国思想文化の研究で世界的に知られている余英時先生も日本の中国学界の貢献を高く評価しています。例えば、吉川幸次郎をはじめとする中国の古典文学を研究する学者たちは優れた業績をあげています。吉川氏は儒教の古典から中国の古典小説まで翻訳して、特に杜甫の研究が有名です。白川静の文字学の研究も成果が多く、「漢字の天才」と呼ばれています。白川氏の漢字・文化に関する著作は、学界のみならず、多くの一般読者からも好評を得ています。

最近、友人から東洋思想の研究者である田口佳史の本を二冊もらいました。一冊は江戸末期の思想家横井小楠についてのもので、もう一冊はまもなく日本の一万円札の図柄になる渋沢栄一に関するものです。前者は私が以前書いたことがある、近代日本の優れた政治家勝海舟の最も尊敬する二人の同時代人の一人であり、後者は2021年に大ヒットしたNHKドラマ「青天を衝け」の主人公で、日本の資本主義の父として知られる人物です。友人が著者を高く評価しているので、読んでみました。象牙の塔の中での書き方ではありませんが、ベストセラーを何冊も出し、東洋哲学の古典もいくつか翻訳しているこの民間研究者は、東洋文明が西洋文明を圧倒するという偏見なしに、現代の視点から東洋思想を語っており、思考のバランスをよく保っています。また東洋と西洋の知恵の融合を強調して、独自の見解を

持っていることもわかりました。民間東洋思想研究という分野は、私にとっては新鮮なもので、昔からビジネスや政治にまで影響力があると聞いています。日本から東洋思想がどうみられているのか、中国国内の読者はたぶん関心を持つだろうと思い、詳しく知りたくなりましたので、著者と連絡を取り、インタビューを申し込みました。驚いたことに、田口先生は快く引き受けてくださったので、二時間のオンライン・インタビューを予定しておきました。インタビューは実際してみたら、とても楽しい対談となって、特に共通の好きな碩学や著名人が何人もいることに驚きました。ここではインタビューの内容を紹介しましょう。

田口先生の著書を読んだ時、そこにある簡単な自己紹介を読みました。若い頃は、実は思想の勉強をしたわけではなく、学者出身でもありませんでした。将来が有望なドキュメンタリー映画監督として活躍していたのです。そこで、「東洋思想に興味を持つきっかけは何ですか」というところから話を始めました。

田口先生的話によると、二十五歳の時、タイヘドキュメンタリーを撮りに行きました。ある朝、ドキュメンタリーの撮影に向かう途中で、広大な水田で穀物の脱穀を手伝う二頭の力強い水牛を見かけ、その水田の光景に魅了されたので、それを撮りたくなって、途中下車をしました。ところが、撮影中、水牛が突然狂ったように突進してきて、無防備な田口先生を下から角で刺し、内臓まで露出する大けがを負わせて、一瞬にして生死の境をさまようことになってしまいました。当初、バンコクの病院では、責任の追及を恐れて救助にとまどったそうですが、病院側が説得されたので、若い監督の命を救うことができました。療養中、友人が退屈しのぎに『論語』や『老子』などの書物を持って来てくれたので、田口先生は読み始めました。今年、齢八十に達する田口先生は、『論語』はあまり読む気がしませんでした。白文の『老子』を読んでみたら、老子が語る死生観に強く共鳴したので、生死とは何かを深く理解し、生きる勇気をもらったと述懐しています。東洋思想の世界に学問から入ったのではなく、病床で生命を維持するための精神の糧として読んだので、より純粹により深く理解できたと強調しました。これが東洋思想に興味を持つきっかけとなりましたが、今振り返っても、老子を通じて東洋思想の世界に足を踏み入れたことは、絶好のきっかけだったと田口先生は懐かしそうに語っていました。

帰国後、『老子』を読み直ただけでなく、『荘子』も読むなど、読書の幅をさらに広げました。道家を読んだら儒教も読みたくなって、四書五経などの儒教の古典を読むようになり、仏教や禅宗も勉強するようになったそうです。二十歳前後に座禅をしたことがあるので、また始めました。田口先生が言うには、これらの東洋古来の思想は、何世紀にもわたって日本に伝わり、よく蓄積されており、西洋の思想とは異なる独自の伝統を形成しています。もちろん、日本には独自の神道の伝統もあり、田口先生はそのすべてを学んできました。

而立の年に、自分で会社を作り、倒産した会社の管財人をしたりして、事業に失敗した人の例をたくさん見てきたので、自分がこれまでに恩恵を受けた東洋思想が、彼らに精神的な励ましや助けを与えることができないだろうかと考えていました。「私自身、東洋思想から得たものが多く、独り占めできないので、できるだけ多くの人に知ってもらい、より多くの

人がその恩恵を受けられるようにしたいと考えていたので、この仕事を始めたのです」と田口先生は当時の動機を振り返りました。現代社会は経済社会だから、特に会社を経営するリーダーは、より多くの人に影響を与えることができるため、事業者こそもっと東洋思想を理解すべきだし、彼らに伝えるべきだと考えていたそうです。

そこで、企業経営者に東洋思想の講義をするようになり、以来三十年以上、延べ2000社に講義をただけでなく、日本の官庁や自治体、教育機関などでも東洋思想の研修を担当しています。田口先生は、こうした伝統的な思想資源は、それを聞いた人のためになり、特にビジネスで失敗した人が力を取り戻し、精神的に強くなるのに役立っていると言っています。同時に、東洋思想を紹介する著書も多く、『老子』、『孫子』、『論語』などの「超訳」本（最近、日本で流行りの言葉で、より簡潔で読みやすい翻訳という意味）を出しています。若い頃からどんなに忙しくても一日に二時間程度、東洋思想の古典を読み続けて、五十年以上経っていますが、最近でも新たな発見や収穫があるそうです。また、東洋思想の知恵をより多くの人に知ってもらうために、毎月ニュースレターを書き続けており、その英語版と中国語版もネットで配信しています。

そんな紹介を聞いていると、長年、東洋思想を伝えてきた最大の収穫は何ですかと聞きたくなりました。「二点あります。まず、東洋思想は人間の全人格、全体的な能力を重視します。例えば、禅宗では、普通の状態では理解できない心の状態を悟りと言います。この分野はまだ未開拓の部分が多く、人間の能力のすごさを実感できて非常に面白いです。今はAIの時代と言われていますが、人間はそれに負けないためにも、この能力を開発すべきです。もう一つは、東洋思想が宇宙全体の関連性を理解するのに役立つことです。この点に関しては、東洋思想は古代の仏教から始まり、三千年以上にわたって研究されてきました。ユングの共時性の話と同じように、『易経』にはこのテーマに関する議論が多く含まれており、この古代東洋の知恵を全人類に広げることができれば、人類の幸福を高めることができます。現在は「人新世」と呼ばれており、深刻な環境危機、地球温暖化などの問題、さらには戦争の危機にも直面していますが、東洋思想はこれらの問題を解決するためのアイデアを提供できると信じています」と田口先生は熱っぽく語っていました。

この説明を聞いたあと、私は次のように質問しました。「西洋思想の欠点を補うために、東洋思想はいったいどのように使われるべきでしょうか？」田口先生は、「これはまさに私が今研究しているテーマで、非常に重要なことです。デカルトやニュートンに代表される近代西洋思想が、夙に自らの問題点を露呈しています。つまり危機的状況にあることは、以前から指摘されていたことです。例えば、昨年、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）は、最新の評価報告書において、「人間活動が大気、海洋、陸地の温暖化を引き起こしていることに疑いの余地はない」と述べており、地球の温暖化が人為的なものであることを明確にしたのです。この人為的な起源は、具体的には資本主義の経済活動であり、その背後にある思想はもちろん近代西洋思想です。今日の地球の危機は、近代西洋思想に起因していると言えるでしょう。近代西洋思想がもたらした問題を解決するためには、東洋思想で補完する必要

があります。こう言うと、あなたは東洋思想の研究者だから、もちろん我田引水でしょうと批判されそうですが、私が出会った異なる分野の複数の西洋学者も私の意見に賛同し、グローバルな視点から東洋思想と西洋思想は補完し合うべきだと考えているのです。そこで私は東洋と西洋の知恵を融合し、互いの弱みを補完することを提唱しているわけです。地球と人類を救うという観点から、この二、三世紀の間軽視されがちな東洋思想は、多くの知恵を提供することができるので、私の使命は東洋思想の観点から有益なアイデアを提供することです」と田口先生は自分の使命を真摯に述べました。

実際、西洋思想に対する批判は、周知のように、古くは二十世紀初頭のスペングラーの『西洋の没落』があり、第二次世界大戦後は、フランクフルト学派のアドルノとホルクハイマーが書いた『啓蒙の弁証法』など、昔からたくさん聞かれています。東洋の世界では、約百年前の梁啓超の著作にも関連するものがあります。そこで私は田口先生に「近代以降の西洋思想の欠点はもっと具体的に言うと、どういうところですか」と尋ねてみました。

田口先生は三点あると答えてくださいました。具体的に言うと、「一つ目は、一点集中主義です。つまり、一点へ全力を集中することです。例えば、経済発展はGDPだけを目標にしますが、これは東洋思想の陰陽論によれば、陽があっても陰はないことになります。長い目で見れば、もちろんトラブルも起こるでしょう。もうひとつは、合理主義、効率主義です。短期的には結果が早く出て合理的ですが、長期的には人類が長年大切にしてきた良き伝統を破壊することになりかねません。三点目は、一般的に使われている分析的な専門主義です。例えば、医療を例にとりましょう。各臓器の専門家がいますが、専門家は体全体に関する知識が欠けています。現代社会における専門性の重視は、確かに重要で必要ですが、あまりにも細分化しすぎると、例えば会社の運営において、財務担当者は財務しか知らず、営業担当者は営業しか知らず、それぞれは会社全体の運営を理解していないので、全体観を持って運営しなければならない会社の運営に支障をきたすことになりかねません。だからこそ、東洋的な考え方は、全体的な視野を養うのに役立つわけです。つまり、専門家は無数にいても、全体を見渡せるジェネラリストはほとんどいないのが現状で、これも機械的な世界観による一種の思考の貧困で、近代西洋思想の限界というべきでしょう。この問題に対して、東洋思想の生命論的世界観は補完することができます。現実の問題として、すべての国が自国の国益を優先させたら、世界が混乱してしまいます。地球が重大な危機に直面している今、人類の生存と発展のために不可欠な、総合的な思考と長期的なビジョンを持つことが必要です。東洋思想は元々ホリスティックな思考を重んじるので、以前は蔑ろにされていたこの思想資源が、今はかえって先進的な思考になる可能性を秘めているのです」と、田口先生は東洋思想の意外な先端性と可能性を指摘しました。

この言葉は、長年西洋哲学を学んできた私のような人間にとって、頂門の一針で、もちろん全く異論がないわけではありません。そこで、「ご意見は近代化が完全に実現した日本ではよく理解できますが、中国はまだ近代化の過程にあり、理解が異なるかもしれません。もちろん、中国も近代化の過程でいくつかの問題に遭遇しています。これについてはどう思わ

れますか？」とさらに質問しました。

「西洋的な近代化によって引き起こされる問題を、今から注意しておかないと、十年、二十年後は必ず大きな問題を引き起こすこととなります」と田口先生はまず忠告しました。「つまり、現在の西洋化モデルを踏襲すればするほど、それがもたらす問題を意識する必要があります。幸いなことに、中国は東洋思想の主な発祥地であり、中国の近代化は西洋を丸ごとコピーする必要はなく、東洋思想の知恵を十分に吸収することができます。例えば、中国では医学を漢方と西洋医学に分けたのは、東洋と西洋の知恵の融合の良い例です。今後、近代化の過程でも同じことをすると良いでしょう」と付け加えました。また、田口先生は日本の近代化を例に挙げ、明治維新で近代化が始まったとき、それは純粋な西洋化と理解され、西洋的近代化の負の側面も一緒に受け継がれて、それが第二次世界大戦の原因の一つとなったとその問題点を指摘しました。また、西洋流の近代化だけでは、欧米に追いつくことはできず、アメリカ化か西歐化という亜流にとどまり、先進国の後塵を拝するだけに終わってしまうと述べました。

これを聞いた筆者は、「二十年前、三十年前にお言葉を聞いたら、中国は近代化が始まったばかりで、現実感覚がなくて、たぶん耳を傾けなかったでしょう」と冗談半分に言いました。実際、中国の急速な経済発展のために、環境汚染などの問題が懸念されており、近代化の師とされてきた欧米も多くの問題を抱えているので、かつてのように理想化できなくなりました。私は、ちょうど読んだばかりのポーランド亡命哲学者コラコフスキーの著書 *Endless Trial of Modernity* を思い出して、近代を賞賛するだけではいけない、進歩はするが必ず失われる良き伝統もあるといったこのポーランド哲学者の近代批判を田口先生に紹介しましたら、田口先生はこの哲学者の意見に即座にうなずきました。

西洋の近代化について、田口先生が言うには、百年も前から多くの西洋の知識人が警告していたこと、特に1945年以降、戦後の日本は西洋の近代化を丸ごと受け入れるのではなく、良いものは取り入れ、悪いものは捨てるという態度で臨むことが大切で、東と西の知恵は融合できるはずだと主張する人がいました。東洋の国々は、自分たちの宝物である伝統を忘れてしまっただけと強調し、田口先生はそれを説明するために、最近書いた幕末の思想家佐久間象山の唱える「東洋の道德、西洋の芸術」（この場合、芸術とは技術のこと）に触れました。これは清末の張之洞の「中学為体、西洋為用」と似ている発想です。日本思想史の大家である丸山眞男の晩年の代表作で、つい最近中国語に翻訳された『忠誠と反逆』には、「幕末における視座の変革—佐久間象山の場合」という興味深い論考があり、佐久間がいかに伝統的な儒教の概念を巧みに利用して西洋の学問を吸収したかが詳細に説明されています。

田口先生は、佐久間と同時代の思想家である横井小楠にも触れ、「横井と佐久間はともに日本の近代国家の青写真を描いた中心人物ですが、残念ながら二人とも維新の反対派に暗殺されてしまい、日本には国の大きな方向性を考えることができる優れた知性がいなくなりました」と二人の先駆者の死を大変残念がっていました。前出の横井小楠に関する本の表

紙に「現代日本の進むべき道を一五〇年前に示していた」と書かれており、田口先生が横井を高く評価していることがよくわかります。現代日本の大作家坂口安吾が近代日本最大の政治家と評価した勝海舟もまた、横井小楠の影響を強く受け、西郷隆盛と並べて最も敬服する人と評価したことを思いだせば、田口先生の見解は決して大袈裟ではありません。

横井小楠に話が及んだ後、田口先生はふと康有為のことに触れて、康有為も東洋と西洋の知恵の融合を主張した人物で、自分の周りには康有為を研究する学者がいると言いました。これに対して、中国では最近康有為が再評価され、新しい全集も出版されて、近代中国最大の思想家と見る学者もいると私が説明しましたら、田口先生は日本には康有為を研究する学者だけでなく、梁啓超を研究する学者も多くいると付け加えました。そして、「自分は康と梁の両方から大きな影響を受けています」と言い、中国と日本の学者が力を合わせて康と梁を研究すべきだと提案しました。

康有為と梁啓超の話を一時的に置いて、田口先生は「次の話題に移りましょうか」と親切に注意してくださいました。時計を見ると、予定の時間の半分を超えましたが、準備した質問の半分もしていないことに気づき、慌てて次の話題に移りました。西洋の学問の影響を強く受けてきた私としては、ちょっと聞きにくいことですが、「東洋思想は西洋思想に比べて欠点や弱点がないのでしょうか？」と聞いたら、田口先生は微笑みながら、「半世紀以上にわたって東洋思想を研究しているので、陰陽学の観点から見れば、もちろん、長所もあれば短所もありますよ」と答えました。「具体的に言うと西洋の思想は、普遍性という点では非常に強力です。技術用語で言いますと、モジュール化という点ではすぐれています。真理を探究する方法として、男女を問わず活用できます。最も象徴的なのは、コンピュータです。コンピュータは、一昔前は専門家だけのもので、会社にはコンピュータ室がありましたが、今は同じ性能のコンピュータが小型化され、一般の人でも使えるようになっています。東洋はもっとこのような西洋の学問の長所を学ぶ必要があると思います。これに対して、東洋の学問はどうでしょうか。先ほど、東洋思想は人間の全体的な能力を重視し、いかに人間の全体的な能力を引き出すかということに重きを置くと言いました。例えば、禅宗を見ると、実はとても専門的です。知的な理解よりも、身体を使って直接感じるということが重要視され、何度も練習しないと身につかないので、マスターするには非常に時間がかかります。私は五十年間勉強してきて、やっとわかったこともあります。そういう意味では確かに大きな欠点があります。講演では難しい内容をできるだけ易しく説明するように気をつけています。この観点から、東洋と西洋の思想や学問は、まさに相互補完的な関係にあると言えるでしょう。相補的であるだけでなく、横井小楠は「天理は二つない」と言って、つまり天理は東と西に分かれておらず、究極的には一つであるから、理性や思想を東と西に分ける必要は究極的にはありません」と説明したあと、田口先生は「日本には昔から『三教帰一』という言葉がありますが、中国にも同じような言葉があるのでしょうか？」と聞いたので、私は中国の大学者銭鍾書が、「東海西海，心理攸同；南學北學，道術未裂」（東洋と西洋では心理が同じで、南の学問も北の学問も、道術が分かれていない）と言ったことを紹介しました。

この時、私が尊敬してやまない勝海舟のことを思い出しました。明治維新の時、武士出身の勝海舟は東西の補完性を強調し、西洋一辺倒を唱えなかったことを覚えているからです。私が勝海舟の名前を挙げたのを聞いて、田口先生は「私は勝と血がつながっていますよ。子供の頃、親からお前の体には勝の血が流れていますから、あれもこれもしてはいけない、しっかり勉強しなさいとよく言われていたので、とても辛かったですよ」と小さい時のことを振り返りながら、武士出身の政治家である勝海舟の学習能力の高さにも言及しました。日頃、勝海舟の代表作を机の上に置いている私は、数年前に「南方週末」に勝海舟についてのエッセイを寄稿したことと、彼の代表作『氷川清話』を翻訳する予定があることを話したら、田口先生は、「翻訳して出版されれば非常にいいことです。中国の読者は必ず面白いと思いますよ」と励ましてくださいました。「そうですね。李鴻章と同年の友人で、中国に共感し、その見識が時代を超えて卓越した能力を発揮した優れた人物が近代日本にいたことを中国の読者が知っていたら、大変驚くでしょう」と答えました。

田口先生は東西文明の補完性を体現する人物として、『論語と算盤』を著した日本資本主義の父、渋沢栄一の名前を挙げました。私は、「渋沢栄一の生涯を知るために、御著書『渋沢栄一に学ぶ大変革期の乗り越え方』を読みましたが、まさに近代日本の傑物で、その考え方は現在の問題を考える上でも非常に刺激的ですね」と感想を述べました。

「勝海舟が高く評価した横井小楠も、中国の読者に紹介する価値がありますよ」と田口先生は付け加えたあと、こう述べました。「欧米列強が東アジアに進出してきた時代に、朱子学の研究者である横井は、これを武力と思想の対決であり、西洋近代文明による儒教文明への挑戦であると捉えていました。当時、このような考えを持った東洋人はほとんどいませんでした。つまり、戦争より以前の問題は、思想の対決の問題と彼が言ったのです。横井は平和主義者で、戦争は無意味だと反対しましたが、思想の対決を重視しました。東洋の思想は西洋の思想に影響を与えるために使われるべきであり、東洋の思想にはその深さと広さがあるからと彼は信じていました。横井は『尚書』を一字一句丁寧に読み、そこから先ほどの東西の区別のない「天理」という言葉を使ったのです。『尚書』を読むことによって、洋の東西を問わず、地球全体に通用する思想を提唱したのです。そのような考え方は、現在の世界の問題を考える上でも非常に示唆に富むもので、世界平和に貢献できると思います。私が本の中でよく使っている「宇宙の法則」は、彼からヒントを得たのです。今、自国至上主義を強調する国がありますが、横井の思想はそういう国家主義を克服するのに役立つと思います。また、東西文明の関係についても独自の見識を持っており、中国の読者にもぜひ彼の考えを知ってもらいたいですね」と田口先生は横井の今日的意味を情熱的に語りました。

日本の思想も東洋思想の重要な一部で、中国の読者のために、日本の代表的な思想家を何人か推薦してもらいたいとお願いしましたら、この時、田口先生が井筒俊彦（1914-1993）の名前を挙げたのに大変驚きました。先ほど、「勝海舟と血がつながっている」と言ったのを聞いた時と同じです。田口先生はさらに「井筒俊彦先生の授業を聞いたことがあります」と言ったので、さらにうらやましくなりました。井筒俊彦は東洋と西洋の哲学思想に通じる

言語哲学の大家であり、デリダが巨匠と呼んだ並外れた碩学です。井筒氏は約 30 の言語を操り、『コーラン』の翻訳（岩波文庫）もあります。また有名なエラノス会議に参加しただけでなく、国際人文思想界でも有名な人物でした。古典文庫として知られる岩波文庫には、彼の著作が何冊も収められています。前世紀の末、宮崎市定と同じ時期に彼の著作集が出版された時、日本における大学者の時代の終焉を象徴するできごとだとまで言われました。彼の作品の中国語訳を私は知りませんが、中国で紹介する価値は十分にあると思います。なぜならば、井筒俊彦は 20 世紀の日本が世界に貢献した哲学の巨匠であり、東洋と西洋の知恵を融合させた独自の哲学者だと言われていいますから。スーフィズムの神秘思想家イブン・アラビーと老荘思想の比較研究である『スーフィズムと道教』が出版された時、西洋の人文思想学界に衝撃を与えたと言われていいます。何年か前に、Hans Thomas Hakl という学者が、*Eranos: An Alternative Intellectual History of the Twentieth Century* という本を出したが、その中で井筒俊彦の思想も紹介され、「彼は東洋思想に精通しているだけでなく、西洋哲学にも造詣が深い。「エラノス会議」にもっともふさわしい人物である」と書いてあります。田口先生が彼の名前を挙げた時、まるで待ち合わせの暗号を手渡されて見事に一致したように、知的興奮を覚えたのです。現代日本の東洋哲学者の中で、田口先生は井筒俊彦を最も尊敬していると絶賛しました。

井筒氏の学問の話をしてしながら、田口先生が取り出したのは、私も持っている氏の英文著作、*The Structure of Oriental Philosophy: Collected Papers of the Eranos Conference vol. II* でした。井筒俊彦がエラノス会議で発表した英語論文をまとめたものです。田口先生は、「中国の読者に井筒の作品をぜひ読んでほしいですね」と語り、「井筒は 20 世紀における日本の東洋思想の最高峰です」と強調しました。井筒俊彦の作品をいくつか読み、分厚い研究書も読んだことがある一読者として、この評価に対して全く同感です。井筒俊彦と同じような学問を持つ中国の碩学を探すならば、同時代の学者銭鍾書や金克木が挙げられると思いますが、学問の広さでは、井筒氏は私が尊敬するこの二人の碩学を超えていると思います。田口先生は井筒氏の著書を読んで東洋思想への理解を深められたと言い、「井筒先生は言葉の天才で、古典はすべて原語で読んで、その知識欲は果てしなくて、また洞察力も抜群です」と称えて、その知識の広さと深さに驚嘆したそうです。田口先生はまた井筒先生の講義を聞いた時のことを思い出して、「いろいろな考えや知識がつながっています」と今でも感心しています。たとえば、井筒先生はイスラム文明の大家ですが、イスラムの話をする時、イスラムと仏教の共通点にも触れたので、井筒先生の話聞くのは大変面白くて、思想と知識の饗宴であり、今ではもうそのような講義は聞けないと言いました。また、中国でも有名な鈴木大拙も推薦し、この二人は 20 世紀の日本の思想家の中で東洋思想における最も示唆に富む人物であると述べました。

この二人の現代の巨匠に加えて、中国の読者が日本の思想や文化を理解するのに役立つ古典をいくつか推薦してほしいとお願いしましたら、田口先生は世阿弥の『風姿花伝』と岡倉天心の『茶の本』を挙げました。世阿弥は中世日本の猿楽の大家であり、多くの作品を残



していますが、『風姿花伝』は彼の演劇に関する理論をまとめた作品で、「能楽の聖典」と呼ばれています。岡倉の作品は中国語にすでに翻訳されていますが、日本文化を紹介する名作であることは言うまでもありません。田口先生はこの二冊の本を読むことが日本を理解する上で非常に役に立つと言いました。

もう一人紹介した思想家は田口先生自身も大きな影響を受けた中世仏教思想の巨匠である道元です。道元は南宋に留学したことがあり、その『正法眼蔵』は日本仏教史上の重要な古典として知られています。田口先生は道元が日本の知的伝統の重要な創始者の一人だと位置づけています。一般的には、道元は日本の曹洞宗の開祖であり、日本の禅宗を代表する人物とされていますが、田口先生によれば、道元自身はその区別をせず、自分が説いたのは仏教だと言ったそうです。確かに、日本の仏教を理解する上で、道元は避けて通れない重要な人物です。有名なアメリカ系華人学者傅偉勳が道元について書いた論文を読んだことがあります。彼も道元の思想を重視したと覚えています。田口先生はまた「鈴木大拙は臨済宗の研究で有名だが、道元からも深い影響を受けています」と述べました。この時、「新渡戸稲造の『武士道』や内村鑑三の『代表的日本人』は中国で読者がいますか？」と聞かれました。前者は中国語に翻訳されていますが、後者は翻訳されていないようだとは答えました。余談ですが、内村はクリスチャンで政治哲学者として有名な南原繁の師であり、近代日本の思想・文化の発展に大きな影響を与えた人物です。因みに丸山眞男の内村に関する論考「福沢諭吉、岡倉天心、内村鑑三——西歐化と知識人」も『忠誠と反逆』に収められており、一読の価値があります。田口先生は『武士道』や『代表的日本人』は批判的に読む必要がありますが、この二冊は日本の思想や文化の概要を理解するのにふさわしくて、中国の読者にお勧めしたい読み物です」と付け加えました。

田口先生の日本古典についての紹介を聞いて、もう一つ質問したくなりました。実は、この質問はもともと用意されたものではなく、東洋と西洋の知恵の融合を重視し、東洋思想を研究して、また説いてきた田口先生が、長年にわたって影響を受けた西洋思想家について挙げてほしいというものです。田口先生は「ユング、ハイデガー、マズローを中心に、たくさんいますよ。ユングの影響は、東洋の研究ではなく、分析心理学です。マズローに関しては、彼の人間主義的心理学です。マズローの心理学には、「ピーク体験」という概念など、人間の本質を理解する上で、彼はポジティブな側面に注目し、私の考え方の原点のひとつです。一方、ハイデガーは、私の東洋思想研究に最も大きな影響を与えた西洋の哲学者です。彼の作品を読んで気づいたのは、彼は非常に東洋的な思想家ですね。西洋の思想家が東洋の思想をどう見ているのか、最も代表的なのはハイデガーです」。ハイデガーが蕭師毅と一緒に『老子』をドイツ語に翻訳したことを話したら、田口先生は「知っています。まさに私が東洋思想を研究するきっかけとなった古典的作品です」と言いました。

正直に言いますと、ユングやハイデガーの名前を耳にしても、あまり驚きませんでした。田口先生がユングから受けた影響は、東洋文明についての考え方ではなく、分析心理学からだと言ったのには実に驚きました。マズローの名前を聞いて、何年も前に読んだマズローの

伝記や華夏文庫版『人間の可能性と価値』に収録されている彼の論文を思い出して、さらに驚きました。私はこの三人の思想家は中国でも翻訳され紹介されており、いずれも多く読者を持っていることと、特にハイデガーは日本と同じように根強い人気があることを紹介しました。中国ではあまり知られていませんが、日本はドイツを除いて、世界で唯一ハイデガーの全集を出版している国であり、田口先生の研究に十分なテキストを提供し、関係文献は正に汗牛充棟と言えるぐらい豊富です。

時計を見ると、すでに予定の二時間を超えており、そろそろお別れの挨拶をしようとしたと思った時、最後の質問を思い出しました。中国の読者に読むべきと思われる中国の古典を二冊推薦してもらいたいと言ったら、田口先生は『大学』に関する本と『尚書』に関する本を最近出版したと言いました。本屋では、ほとんどの読者が二冊一緒に買って帰るそうです。それは講義をもとに作った本で、送ってくれると約束してくださいました。田口先生は日本から見た中国には四書五経をはじめとする長くて豊かな文明の伝統があり、それらを改めて読みなおし、新しい視点で自分たちの伝統を見つめ直す価値があると述べました。なぜなら、それらの古典は人間の根本的な真理を語っており、現代の視点から読むと、古典は新たな生命を持ち、古来の伝統が非常に高度な現代思想にさえなり得るからです。最近中国でも古典に興味を持つ人が増えており、自国の伝統を知りたいと思う人が多くなっていますので、先生のアドバイスはタイムリーですと昨今の中国の状況を少し紹介しました。

オンライン・インタビューからわずか二日後に、田口先生から新しいハードカバーの本が二冊届きました。『「書経」講義録』と『「大学」に学ぶ人間学』です。二冊とも人間学に関する出版で知られている、半世紀近い歴史を持つ致知出版社から出されたものです。経営学の巨匠稲盛和夫の本もいくつか出しているところです。著者の真摯な姿勢に感動して、すぐに開封して読みました。『「大学」に学ぶ人間学』を紐解くと、第三講「維新の精神」に「コロナ禍を学問の仕直し、人生観の立て直し期間に」との一節があるので、この部分まで飛ばしてさっそく読むのはじめたのです。そこには、コロナが流行って出口が見えない状態が続いていますが、このままモヤモヤしてはいけなないと思ひ、もしかしたら、天がもう一回学び直せというシグナルを送っているのではないかと著者が書いています。そこで、若い頃に読んだ東洋思想の古典を読み直し、その得るところの大きさに驚いたと感想を述べています。今まで読まなかったものが理解でき、あるいは理解が深まり、その分幸せな気持ちになったそうです。だから、なるべく外出を控えるように言われていた時期こそ、普段は読む時間がない古典を読むいい機会なのです。また、この一節では、近代日本の進むべき道の構想係である横井小楠と佐久間象山についても触れていますが、実は彼らは人生のかなりの時期を塾居と幽閑の中で過ごし、その間に学識や見識を大きく向上させたそうです。コロナの流行と儒教の古典をむすびつけて読むという話は、実に新鮮な発想です。そうした古典の読み方から、田口先生がインタビューの中で何度も言った「活学」という言葉を思い出しました。特に古色蒼然という印象を与えないために、東洋思想のような古い学問は、社会的実践の中で試されるべきで、そうすることによって、古い思想が新しい生命を持ち、人々が現

代の問題を考え、人生に役立つ学問となるべきだと田口先生は主張しています。

田口先生の熱心な推薦もあって、長い間読んでいなかった井筒俊彦の本を探し出して読みはじめました。それは現在岩波文庫に入れられた『意味の深みへ—東洋哲学の水位』です。どの論文を読もうか迷ったので、まず「人間存在の現代的状況と東洋哲学」（1979年12月発表）を読みました。これは元々英語で書かれた長い論文です。久しぶりに井筒先生の文章を読んだのですが、実に興味深く、示唆に富むものでした。東洋哲学と現代物理学の関係だけでなく、カール・ポパーのフレームワークの概念で異なる文明の構造を語り、ガダマーの *Horizontverschmelzung*（地平融合）の概念、トーマス・クーンのパラダイムシフトの概念、さらには現象学的社会学者アルフレッド・シュルツの存在世界の「日常的停止」という概念も使われています。東洋と西洋の思想がそれぞれ論文の中で偏重することなく、自然に融合されています。井筒俊彦は、科学技術の発展により、グローバリゼーションは「一様化」と「多様化」を同時にもたらし、その過程で人々は自分自身から疎外され、場合によっては自己を喪失してしまったと指摘しています。東洋哲学は古くから自己疎外の問題を人間存在に関わる重要な問題として探求してきたので、近代がもたらした危機に直面して、東西対話のエネルギーを活性化できる東洋哲学的な自己観を持ち込むことは、非常に有効であり、意義があることだと主張しています。四十年以上前のグローバリゼーションの危機に関するエッセイを一気に読みおわりましたが、古さを全く感じさせず、むしろ新鮮に感じられたのは大変な驚きでした。彼の知識はあまりにも膨大で、その学問を詳しく説明するには分厚い一冊の本が必要です。この作品を読んで、井筒俊彦が現代日本の東洋哲学思想研究の最高峰であり、中国の読者に紹介することが非常に必要であるという田口先生の推薦を裏付けるものであると改めて確信できました。確かに中国の学界にとって大きな参考価値があり、おそらく東西文明で百年以上悩まされてきた問題に対して新しい知見を提供するだろうと筆者は信じています。井筒俊彦の思考の重点は東洋哲学にありますが、西洋哲学の造詣も同様に深く、自家薬籠中のものにして自分の哲学を構築したのです。ちなみに、ロシア精神に関する著書『ロシア的人間』もあり、ロシア・ソ連文学の読者層が厚い中国でも興味を持ってもらえるでしょう。